

國學院大學学術情報リポジトリ

寛永文化期の鷹峯

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 工藤, 隆彰, Kudo, Takaaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000374

寛永文化期の鷹峯

一、はじめに

洛北に位置する鷹峯は、日本文化史・美術史にその名を大きく刻む本阿弥光悦が住した場所として知られている。本阿弥一族の家記である『本阿弥行状記』上巻には、光悦が元和元年（一六一五）に京都所司代の板倉勝重を介して徳川家康から鷹峯の地を拝領し、一族や友人達に分けたとある。いわゆる「光悦村」の形成であるが、これを踏まえた先行研究では、鷹峯に対して主に二つの認識が示されてきた^①。一方は光悦周辺による

芸術の場、もう一方は本阿弥一族の法華信仰に基づく宗教的理想郷というものである。

他方、鷹峯の土地を領有したのは「光悦村」の人々のみではなく、徳川秀忠の侍医を務めた野間玄琢とその子達も山荘や薬園を構えていた。経緯は明らかでないが、開拓は光悦と同じく元和元年とされている^②。書写年次を承応三年（一六五四）とする『光悦町古図写』で描かれた光悦達の集落の東側に「玄沢町^{（玄沢）}」と記されているため、鷹峯を論じるなかで玄琢に触れた先行研究は既にあり、正保二年（一六四五）付の『山城国愛宕郡大宮郷家数人数指出 同大宮郷草山之覚』が示す戸数・

工藤隆彰

人口に基づいて、玄瑑達の集落の規模は非常に小さかったことも指摘されている⁽⁴⁾。

しかし、近世の地誌で鷹峯に関する記述を確認すると、野間父子に言及したものは少なからず見受けられる。そのなかには、万治元年（一六五八）刊行の山本泰順『洛陽名所集』巻之八「鷹峰」で「此所は。今宮のにしかた也。近き頃。作れる山舎有。大虚庵^{光悦本阿弥}白雲軒^{野間}など云けらし」と述べられているように、光悦と玄瑑が共に取りあげられている場合もある。そして、当代の文化人達が鷹峯を訪れて交流したのも、光悦のみではなかった。殊に歌人・漢詩人の著述を紐解くと、本阿弥一族・野間父子のもとで為した記文や詠作が多数見出される。鷹峯という環境を論じる際に注目されてきたのは、そのなかで「光悦村」周辺を題材とするものの一部に過ぎないのである。

本稿では、光悦以外の本阿弥一族と、従来閑却されてきた野間父子の存在も重視する。そして、彼等のもとで著された近世初期の文学作品、及びその作者達の動向から、いわゆる寛永文化の時代における鷹峯の位置付けを再検討する。

二、本阿弥一族の周辺

近世初期の鷹峯の様子を伝える記文としては、夙に正木篤三氏が「鷹峯記」、「太虚庵記」、「にぎはひ草」を取りあげていた⁽⁵⁾。最も成立が早い「鷹峯記」は、林羅山が板倉勝重の嗣子・重宗に誘われて鷹峯へ出向き、光悦が構えていた大虚庵を訪れた後、その翌年の寛永七年（一六三〇）に著したものである。これは寛文二年（一六六二）刊行の『羅山林先生集』文集巻第十七に収められているが、一方で詩集巻第十にも、鷹峯付近の景物を取りあげた「普明庵十境」という七言絶句の一群がある。その序で、

龍宝山沙門宗春、字仙溪、^ハ撰^ビ勝于洛北千足村畔、乃^シ誅^ニ茅茨^ヲ、号^{シテ}曰^フ普明。四山遶^ル其庵、誠^ニ是^レ幽処^ニ花本深也。登^ニ山^ヲ腹^ニ而望^ミ之、則^チ鳳城^ト巍^ニ在^リ南、鷹峯^ト峙^ス于西^ニ（中略）仙溪頃^ニ日出^ル山、来^リ于江戸^ニ。价^レ人、請^フ余題^ニ其十境^ヲ。不^レ克^ク峻^ニ拒^ス、遂^ニ賦^シ之^ヲ如^シ左。

と示されているように、普明庵は大徳寺百八十九世仙溪宗春の

庵で、該所周辺の「獅子岩」「夕陽楼」「再来松」「浮梅溪」「寂音堂」「石門」「蒼龍池」「守愚亭」「楞嚴台」「残月橋」が「十境」として各々題にされている。「残月橋」のみ二首詠まれており、その末尾に「巳丑季秋」つまり慶安二年（一六四九）九月の作であることが注記されている。

「鷹峯記」に次ぐ「太虚庵記」は深草元政の手に成るもので、延宝二年（一六七四）に刊行された元政の漢詩文集『草山集』巻之五に見える。しかし、宗政五十緒氏が取りあげている通り、『草山集』には寛文三年（一六六三）春、療養を目的に常隆という旧友の僧が住む妙解庵へ赴いた折の巻之四「遊鷹峰記」をはじめとして、鷹峯における詩文が多数収められている。

日蓮宗を篤く信仰した本阿弥一族は鷹峯に複数の寺院を建立しており、日蓮宗の学僧であつた元政もこれらを訪れた。その際、寺となつていた大虚庵（光悦寺）、光悦の養嗣子である光瑳が建てた「法華の鎮所」を前身とする常照寺について、それぞれ沿革を著わしたのが巻之五「太虚庵記」・「常照講寺記」である。また、巻之四「遊鷹峰記」では大虚庵に続いて知足庵へ向かい「龍師」（頂妙寺八世日龍）に謁したことを述べており、さらに同「重遊鷹峰記」四では普明庵にも訪れたことを記している。なお、「太虚庵記」「重遊鷹峰記」には、

それぞれ羅山の「鷹峯記」「普明庵十境」が触れられている。

このように、元政の鷹峯における詩文は、仏教徒の庵室や寺院を訪ねた結果のものが多く、しかし、『草山集』巻之十九「九月十三夜鷹峰見月集句并引」は詞書に、

九月十三夜之月、多見本朝之詩。在異域則未聞焉。梅雪村所謂婦娥可笑唐人僻、只把中秋作話譚、是也。癸卯季秋、遊鷹峰見月。適會和歌人、探題同詠。不レ及レ作詩因、集古人詩句、為二一絶一。

とあり、十三夜に鷹峯へ赴いていわゆる後の月を観賞し、そこで偶然遭遇した他の歌人とともに詠じたことが示されている。純粹に景観を楽しむ詠作に興じた様子から、元政にとっても鷹峯は宗教的な環境に留まらなかつたと言えるであろう。

さて、天和二年（一六八二）に刊行された『にぎはひ草』は、光悦の又甥・灰屋紹益の隨筆である。幼少から慕っていたという光悦の逸話、そして鷹峯の景観の描写を収めていることから、光悦関連の研究において『本阿弥行状記』と共によく引用されてきた。

『にぎはひ草』下巻には、宗門中興の三師と称される日重・日乾・日遠が『草山集』で詳述されていることへの言及もある。一方、『本阿弥行状記』下巻では元政の『本朝隠逸伝』が触れられ、また「元政上人壁のこし張のよし」とする一文も掲げられており、本阿弥一族は元政の著述を手にとっていたことが窺える。

しかし、『草山集』に本阿弥一族と接触したことを明示する記述はない。具体的に個人名が挙げられているのは「太虚庵記」の「太虚庵乃、光悦翁佳城之地也（中略）翁之曾孫光伝、素篤仏。仍分其地喜捨」という部分に留まる。紹益に関しては元政等の歌人達に客として招かれたと推測されている年次不詳の歌会もあるが、『にぎはひ草』・『本阿弥行状記』、元政の家集で寛文十二年（一六七二）刊行の『草山和歌集』や『深草元政上人和歌集』等を見ても、鷹峯において元政と本阿弥一族が交流した証となる内容は見受けられない。

そのなかで、『草山集』巻之十六に収められた「題空中庵」という一首が注目される。

一室鷺峰下 懸河眼底驚
高岩広長舌 流水梵音声

千歳雪猶在 四時雨未晴
今成轉輪地 永聴法雷轟

これは宗政氏が言及しているように、鷹峯と連立する「鷺峰」の下で詠まれたことが冒頭から窺えるものの、やはり誰のものと訪れたかは記されていない。しかし、「太虚庵」が光悦の庵室で彼の号でもあることに鑑みると、「空中庵」とは光瑤の嗣子で「空中斎」を称していた光甫の庵室ではなからうか。『本阿弥行状記』上巻には、

みちのくの松島を見ける人々、此鷹が峰におよばずと申き。むかしは高き草もなき原にて、前関白秀次公遠目あてをうたせられし所なり。利休居士の御供に参りしに、日本無双の地なりとて、竹の柱にて御茶屋をしつらひ、いつも御茶を被召上げる。今此所には法眼空中斎が住ける。又光悦寺を二町計り過て不足谷といふ所あり。①屏風をたてたるごとく堅横三十丈余りの岩あり。其下に広さ二丈計りにて一丈余り落来る瀧あり。②岸の山吹、岩間のつじ、ながれを染る河の紅葉、何事もいふにはまされり。

のき近き紅葉のいろにうば、れてそらく月のかげぞ

すくなき

此所に草の庵を結び、末法惡世の唱導師、上行菩薩をつを空中斎がみづからきざみて安置し奉り、恩分ふかき主君、父母、六親、法界の為に、便りなき貧僧をあつめ、三年の内に法花一万部を誦唱しける。かく身に過たる面白き所々を住家として、樂みに耽ることそら恐し。

とあり、「空中斎」（光甫）は「光悦寺を二町計り過て不足谷」に「草の庵」を結んでいたことが示されている。その近辺の様子である傍線部①・②は、「題」「空中庵」で言及されている「高岩」及び「流水」と各々照応する。他方、元政は「重遊鷹峰」記「三に、

雨^レ霽^レ登^ニ普明庵^ニ。出^レ門路^ニ徑^ニ未^レ乾^ニ。斜^ニ入^ニ太虚庵^ニ、過^ニ由信行者之室^ニ。行者乃、常唱題之稱^ニ首^ニ也。其室、面^ニ鷲峰^ニ而枕^ニ溪^ニ。東^ニ南佳^ニ景、掩^ニ映^ニ乎松^ニ樹之間^ニ（後略）

と記しており、大虚庵内にある「由信」の部屋は鷲峯に面していて、「溪」（谷川）を臨めたことがわかる。これらを踏まえる

と、元政の言う「空中庵」は件の「草の庵」を指し、鷹峯（にある大虚庵）と鷲峯との間を流れる谷川の側に建てられていたと考えることも可能であろう。光悦・光瑳は寛永十四年（一六三七）に続けて没したが、光甫は天和二年（一六八二）まで在世しており、直接元政を迎えていたとしても不自然ではない。

ところで、先に引用した『本阿弥行状記』上巻の記述の冒頭には、光甫が千利休の「御茶屋」の跡地に住んでいたとある。貞享元年（一六八四）序の黒川道祐『雍州府志』卷第十陵墓門「空中院光甫墓」にも「光甫平生嗜^ム茶。構^ニ茶亭^ニ於鷹峯千利休之跡^ニ、招^ニ貴賤^ニ」と記されているが、光甫のもとに貴顕も訪れていた証としては、権大納言に至った飛鳥井雅章の家集『雅章卿御詠』に、

鷹峯光甫茶屋にて 月契千秋
てらせ猶こよひぞためし千々の秋も
宿に契りて月をこそみめ

という一首が見える。

三、本阿弥一族と松永貞徳

『本阿弥行状記』上巻には、鷹峯周辺の様子が描写されるなかで、

鷹ヶみねは王城の乾なり（中略）鷹が峰西に当て纔に二丁計隔りぬ。麓に紙屋川水草清く、都の内にも住まされりと思ふばかりなり。そば伝ひの細道は山がつの通ひ路なり。

ゆけばゆきとまればとまる月かげの

秋おもしろき川ぞひの水^{（マ）}

とよめる道の辺りに豎横二丈余りの石あり、鏡石と号す。

（後略）

と記されている。ここに挙げられている和歌は、延宝五年（一六七七）に刊行された松永貞徳の家集である『逍遊集』巻三秋部に「河月」の題で見えることが指摘されている^{（14）}。貞徳の鷹峯訪問は、次節で触れる通り『逍遊集』に玄塚の山荘で詠まれた和歌等が収められていることから確認できる。

他方、貞徳の狂歌家集とされている『莞爾草』には、次の一

首が収められている^{（15）}。

本阿弥家にて

いか斗あまのむら雲お、ひけん本阿弥衆もしらぬ名月

下の句の「もしらぬ」は、「本阿弥衆」が「名月」をよく見知っていたことを窺わせる言い回しである。対して、先に示した元政や次節で触れる漢詩人達の詠作から、鷹峯は度々月見の場になつていたことがわかり、月の景観に優れていたと考えられる。これに鑑みると、件の「本阿弥衆」は、鷹峯に住む者達ということも想定できる筈である。

鷹峯における貞徳と本阿弥一族の接触は右の一首から推測されるに留まるが、単に双方の交流を示す史料は他にもある。まず、『にぎはひ草』上巻に次のような記述が見える^{（16）}。

（前略）此事野間三竹とて、近比まで存命たりし人、世に普くしられて、医術のみにもあらずすぐれたる学者なりし、我家にはことの折ふし度々来りて、物がたりせしつゝに、予わか、りし時つれなく草貞徳といふ人にきゝて侍し、其時此段の事かくおもひよりて侍るとかたりければ、打おど

ろきて、わかきものかゝる事いひいでたりとてほうびせられしとかたりければ、三竹其時ぐしける弟子の学よくしけるをよびて、これき、侍れ、さてもき、事なる義にはあらずやと感ぜられしに、程へて三竹の宅にまかりける時、つれづれ草の抄物とてとりいで、いつぞやわぬしの物語の義、此抄に出てありとて見せられけり。人の義を我いひいでたるやうにかたりけるにやとはおもはざるべけれども、いと口おしきことにて有し。(後略)

冒頭の「此事」とは、引用を省略した部分で示されている、『徒然草』第十・十一段に対する紹益の私見を指す。続けて、野間玄琢の嗣子で漢学者・儒学者としても知られた三竹が紹介されるとともに、紹益が貞徳から『徒然草』の講義を受けた折の出来事、それに関して後に紹益が三竹と交わした応答へ話は移っていく。

ところで、小高敏郎氏は「貞徳の伝を語る記事には屡々信頼出来ぬところもある文献」と断りつつ、延宝七年(一六七九)以後まもなくの成立と推定されている『滑稽太平記』が玄琢と三竹を貞徳の「手跡の弟子」としていることに触れて、三竹が「貞徳に師事したことは灰屋紹益の『にぎはひ草』でも知られる」

とする。⁽¹⁷⁾しかし、右の『にぎはひ草』の記述を見ても、貞徳と三竹の師弟関係は読み取れないのではなからうか。

引用した部分の前半は、紹益が「わか、りし時」に貞徳から『徒然草』の講義を受けた際、貞徳へ「此段の事かくおもひよりて侍る」と私見を語ったところ、「わかきものかゝる事いひいでたり」と評価されたことを、後年に自ら三竹へ語ったと解するべきであろう。一連の話において、貞徳と三竹は関わっていないのである。なお、齊藤彰氏は、紹益が「三竹の宅」で見せられた自身と同様の解釈を示す「抄物」に、寛文元年(一六六一)刊行の『徒然草抄』を挙げ、その著者である加藤磐斎を紹益の私見の剽窃者にあてている。⁽¹⁸⁾

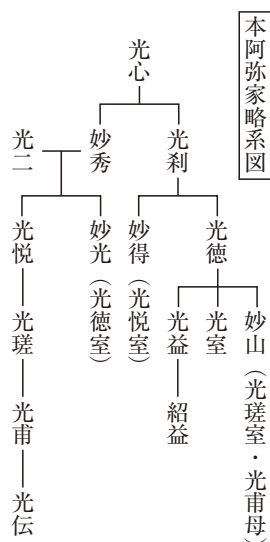
一方で、紹益が貞徳の指導を受けていたことは、小高氏が後に紹介した両者の勘返状からも確認できる。⁽¹⁹⁾また、貞徳一門が寛永十七年(一六四〇)に行った定家卿四百年忌及び幽斎法印三十三回忌追善の会に、紹益は「佐野三郎左衛門重孝」の名で出詠している。⁽²⁰⁾定家追善の会の方には「本阿弥二郎三郎入光甫」の名があり、光甫も貞徳の門弟であったと考えられる。さらに吉田幸一氏は、天保十二年(一八四一)跋の山内香雪編『名家手簡』に、貞徳から「本次郎左様」へ宛てられた次の書状が見えることを取りあげている。⁽²¹⁾

御状忝候、仍御す、めにて、数寄之人多出来、令悦目候、門弟外和哥之点法度にて、不仕候へ共、先随公之命候、他見御無用候、猶以面可申、又十五日之昼之儀可参候、恐惶謹言

右の内容は、「本次郎左」の「御す、め」で訪れた多くの「数寄之人」達に、貞徳は本来「門弟外和哥之点法度」故加點しないところを、「随公」の命で「他見御無用」としつつ対応したことを窺わせるものである。そして吉田氏は、文中の「随公」に「随庵」と称した空性法親王をあてているが、宛先の「本次郎左」については「本阿弥次郎左」とするに留まっている。

貞徳の在世時から大きく年代が下って刊行された『名家手簡』収載の書状を真跡と考えた場合の論であるが、貞徳から「本（阿弥）次郎左」宛で連絡を受けることが想定し得る人物としては、光悦の父である光二と、光悦の養嗣子である光瑳がまず挙げられる。『本阿弥行状記』上巻冒頭に「本阿弥光悦といふ者あり。父は次郎左衛門入道光二といひ」とあり、また小堀遠州が光悦逝去に際して嗣子の光瑳へ送ったものとされている弔状は、宛名が「本二郎左殿」となっている。本来片岡家の出身であった

光二・光瑳は、宝暦九年（二七五九）書写の『片岡氏家系』でも双方同じく「治郎左衛門」と、「次郎左衛門」に音が通じる表記で名を示されている。光悦・光甫の通称として知られている「次郎（二郎）三郎」も一応音は通じるが、表記の異同は光二・光瑳より大きい。なお、本阿弥一族の血縁関係を整理しておく、次の通りである。



貞徳は承応二年（一六五三）に八十三歳で没していることから、光二（一五二二—一六〇三）と光瑳（一五七八—一六三七）では、貞徳と生没年が近い後者を件の「本次郎左」にあてての方が穏当か。その場合、光瑳は寛永十四年十月に没しているのので、『名家手簡』収載の書状はそれ以前のものであるという

ことになる。

「本次郎左」が貞徳に紹介した「数寄之人」達は、どのような人々か具体的には明らかでない。しかし、先述の通り貞徳一門が行った定家卿四百年忌追善の会に、光瑳の嗣子の光甫、義甥の紹益が出詠していることから、彼らをはじめとする本阿弥一族であつた可能性も考えられるであろう。

この他、貞徳作の往来物とされる慶安三年（一六五〇）刊行の『貞徳文集』には、「馬淵主税頭明忠」と「篠村木工丸」から本阿弥光徳へ宛てられた書状が、それぞれ上巻と下巻に収められている。⁽²⁴⁾ この光徳は光悦の従兄弟・義兄で、光甫と紹益に共通する祖父である。実物を手として文例としたのかは明らかでないが、件の二通は刀剣の研磨・浄拭・鑑定に携わつた本阿弥一族の家職と関連する内容である。この家職については、貞徳からの口述筆記で正保元年（一六四四）前後に成立した『戴恩記』下巻にも、「太刀刀の目利は、本阿弥・木也など、鍛冶にあらざれども、国所銘まではづさず、よく云あつる物なれば（後略）⁽²⁵⁾」と言及がある。また、先に引用した『莞爾草』には「本阿弥衆」のもとで詠んだ狂歌がもう一首収められており、

本阿弥衆のもとにて夕立二しきりして

かみなりしければ

二ふりはくいのをとして夕だちの
あとの天気はめき、物かな

というものであるが、このなかに詠み込まれている「二ふり」「めき、物」や、先に示した一首の「あまのむら雲」といった言葉も、「本阿弥衆」と刀剣の繋がりを踏まえたと考えられる。

貞徳の子である松永尺五の漢詩文集で、寛文九年（一六六九）序の『尺五先生全書（尺五堂先生全集）』巻之二にも、「題大虚菴」⁽²⁶⁾という次の一首が収められている。

遙 ^{ニレバ} 到 ^シ 鷹 ^ニ 峯 ^ニ 楓 ^ク 耀 ^レ 前 ^ニ	道 ^シ 人 ^ヲ 評 ^シ 茗 ^ヲ 茶 ^ヲ 陶 ^{タリ} 然 ^ニ
天 ^ニ 遊 ^シ 保 ^シ 寿 ^ヲ 抱 ^キ 測 ^ヲ 静 ^ヲ	塵 ^ノ 外 ^ヲ 占 ^テ 閑 ^ヲ 燭 ^ク 世 ^ニ 纏 ^ヲ
義 ^ニ 献 ^ス 遂 ^ヒ 巡 ^ル 疑 ^ヒ 虎 ^ノ 卧 ^{カド}	鍾 ^ノ 張 ^ノ 羞 ^ム 法 ^ノ 怪 ^ム 龍 ^ノ 齋 ^{カト}
通 ^シ 神 ^ノ 多 ^シ 芸 ^シ 点 ^シ 無 ^シ 俗 ^ニ	惟 ^ニ 徳 ^ニ 惟 ^ニ 馨 ^シ 幾 ^ク 万 ^ノ 年 ^ノ

鷹峯で「茗」（茶）を楽しむ様子とともに、「義献」（王羲之・王献之）「鍾張」（鍾繇・張芝）といった能書を引き合いに出して讃えられている「道人」が、寛永の三筆に数えられる光悦を指すことは明らかである。尺五はこの「題大虚菴」を詠んだ背

景に触れていないが、貞徳の影響で本阿弥一族のもとを訪れる機会があったのであろうか。

四、野間父子の周辺

『寛政重修諸家譜』に拠れば、野間玄琢は天正十八年（一五九〇）に生まれ、若年から曲直瀬玄朔の下で医学を学んだ。慶長十五年（一六一〇）に法橋の位を得て以降はしばしば禁裏に侍し、元和三年（一六一七）法眼、同九年法印と累進している。師である玄朔が慶長十三年に徳川秀忠の治療で招かれた後、隔年で江戸に居住したのと同じく、玄琢も寛永三年（一六二六）に二条城で初めて秀忠に拝謁して以降、隔年で江戸に伺候した。そして同十三年、秀忠の娘にして後水尾院の中宮である東福門院の病状を快然させてその功を賞せられ、同十五年東福門院に附属された。

玄琢の嗣子である三竹は、慶長十三年（一六〇八）に生まれた。寛永十三年（一六三六）法橋、同十五年法眼、同十七年には奥医師として玄琢と同じく東福門院に附属され、それ以降隔年で江戸にも伺候し、寛文八年（一六六八）に法印の位を得た。前節で引用した『にぎはひ草』にも記されている如く、三竹は

医者に留まらず漢学者・儒学者でもあり、多岐に渡る編著を残している。

本稿の冒頭で述べた通り、玄琢が鷹峯の土地を拝領した時期は、光悦と同じく元和元年（一六一五）とされているものの、その詳細は明らかでない。しかし、野間父子は本阿弥一族以上に、幅広い歌人・漢詩人達を鷹峯で迎えていたことが確認できる。まず、玄琢は前節でも詳しく取りあげた貞徳、そして木下長嘯子を度々迎えていた。小高氏が既に触れている通り、それぞれの家集である『逍遊集』と『挙白集』には、玄琢が鷹峯に構えていた山荘で詠んだこと、「たかがみね」を詠みこんだ物名であることを示す詞書が散見される。

他方、八条宮智忠親王の『智忠親王詠草』に収められている、詠作の添削を求めて阿野実顕へ送った書状の一つに「去八日に鷹嶺へ玄琢よび申候て」云々とあり、その端裏書には「寛永十八年五月八日玄琢亭白雲溪に而」と記されている。添削に基づき修正を施した一首も同名の史料に見え、その詞書には、⁽²⁹⁾

五月八日、鷹峯白雲溪といふ所に玄琢亭あり、聖護院宮など同道にてゆきけるに、亭主酒あまたす、め、興にまかせて一首と所望し侍けるまゝに、思ひよりぬ

うつすともえやはおよばんこ、にみる都の四方の遠近の山

とあり、智忠親王の鷹峯訪問には当時の「聖護院宮」、つまり従兄弟の道見法親王も「同道」していたことがわかる。

自身も漢詩人であった三竹のもとには、さらに多様な人々が訪れた。殊に目立つのは、前節でも触れた尺五、そして石川丈山である。尺五・丈山・三竹達各々の漢詩文集である前掲『尺五先生全書』、延宝四年（一六七六）刊行の『新編覆醬集』、寛文六年（一六六六）序の『柳谷集』等には彼らの親交を示す詩文が数多く収められており、鷹峯で為したものが散見される。尺五と丈山が同時に鷹峯を訪れている場合もあり、寛永十五年（一六三八）七月十六日には冷泉為景も交えて「白雲亭」から諸山の列灯を眺め、慶安三年（一六五〇）八月十五日には三竹の弟である韜窩の新宅で中秋の名月を觀賞している。

その他に注目されることを挙げると、寛永十五年十二月八日、狂言師である大蔵虎明の二子が鷹峯で家芸を披露した際に寄せたものとして、尺五と三竹がそれぞれ一首を残している。⁽³³⁾ また、丈山には長嘯子とともに「白雲亭」で会した折の一首があり、⁽³⁴⁾ 長嘯子の鷹峯訪問は三竹の代まで続いていたことが確認できる。長嘯子以外の歌人では日下幸男氏が触れている通り、⁽³⁵⁾ 貞徳

の高弟である望月長孝の一連の家集に、三竹のもとで詠んだことを示す詞書が散見される。⁽³⁶⁾

ところで、三竹については紹益も、前節で引用した『にぎはひ草』の文中に「我宅にはことの折ふし度々来りて」と親しい間柄であったことを記している。しかし、共に鷹峯の地を与えられた玄琢と光悦については、交流を明確に示す同時代の史料を見出せていない。一応、次節で触れるように玄琢の名前が見える光悦の書状はあるものの、両者の接触を具体的に知ることができる内容ではない。

だが、宝暦十年（一七六〇）刊行の南秀女『茶事談』下巻、「本朝茶事相承之図」には、光悦について次のような注記がある。⁽³⁷⁾

近代三筆の一人、又茶并に茶器を好む。最も雅器多。宗旦と交り深し。鷹峰に居て、大虚菴と云。同所に野間玄沢居して、是又交り深し。後、光悦と宗旦と不和になる。其故は、宗旦の嫡子閑翁宗拙と宗旦、父子の間不和にして、宗拙を勘当す。然るに、光悦宗拙を玄沢にあげをく。依^レ之、宗旦と光悦不和となる。宗拙は光悦に筆道をまなぶと云。今に玄沢屋鋪あり。

ここには、光悦が利休の孫である宗旦、及び玄塚と「交り深く、宗旦が嫡子の宗拙を勘当した際、書を教えていた光悦が宗拙を玄塚に預けたとある。寛政十年（一七九八）刊行の三熊花顛原撰・伴蒿蹊校『続近世崎人伝』巻之二にも、同様の逸話が見える。

しかし、既に指摘されている通り、宗旦が三男の宗左へ宛てた書状を主とする『元伯宗旦文書』の一通から知られる宗拙の勘当は寛永十八年（一六四一）であることに對して、光悦は先立つ同十四年に没している。さらに、玄塚のもとに居たのは四男の長吉郎（宗室）であり、宗拙の勘当と同じ年に宗旦自身が医師の弟子とするために預けている。件の逸話を、そのまま事実とすることはできない。

一方で、光悦と宗旦に親交があったことは確認されている。増田孝氏が取りあげているように、屋敷の売却をめぐる光悦の助力があったことを示す『元伯宗旦文書』中の書状三通に加えて、宗旦の茶事の誘いに応えつつ彼が長病から回復したことを喜び、鷹峯でも茶事を催そうとする光悦の書状一通が残っている。

さらに、『元伯宗旦文書』には玄塚の名前が見える書状も数

多く収められており、宗旦と玄塚はまさしく「交り深し」という間柄であったことがわかる。⁽⁴⁰⁾ そのなかで寛永十九年（一六四二）五月十四日付の書状に「一学殿御上候而（中略）我等所より鷹峰へ玄塚振舞へ同心申候」と、「一学殿」（渡辺若狭守直綱）に伴って鷹峰へ出向き、玄塚のもてなしを受けたことが記されている。また、玄塚は正保二年（一六四五）に没して白雲溪に葬られたが、以降は三竹兄弟の名が見え始めるとともに、玄塚を弔いに鷹峰へ行く旨が複数の書状で述べられている。

そして、先に触れた屋敷の売却に言及している宗旦の書状三通のうち、寛永十年（一六三三）十月二十五日付の一通では、

一、第一やしきの事、光悦、周防殿へ申され、何時はなし可申もまゝに成候、五十枚ならば、はなし可申候、可心易候、光悦一段勢入、茶湯によび、其後も被參候、懇に候、可心易候
一、玄塚よび候へ共、隙なく候、やがてよび候て頼可申候、可心易候（後略）

と、話題が光悦から玄塚へ移っている。なお、「頼可申候」と

は先行する同年八月十六日付の書状で述べられている、玄塚に「兵庫様」(寺沢兵庫頭堅高)への取次ぎを頼む件と思しい。同年十二月十一日付の書状に「玄塚より先日返札来候、兵庫殿へ行、懇に取合可申候由、懇に返札候」とあり、後日玄塚は宗旦の依頼を書面で引き受けたことがわかる。

この頃は玄塚に暇がなかったとあるものの、それぞれ宗旦と懇意で鷹峯にも招いていた光悦及び玄塚が、別の機会に宗旦の茶会で同席した可能性は十分考えられる。『茶事談』や『続近世畸人伝』が示す逸話は、そのような宗旦周辺の状況を背景として生じたものではなからうか。

五、おわりに

鷹峯で著された文学作品を集めていくと、地下歌壇を二分し多くの門人を輩出した貞徳・長嘯子、堂上歌壇の中心的存在で後水尾院から古今伝授を受けた雅章・道見法親王、明和八年(一七七二)刊行の江村北海『日本詩史』巻之三で「詩豪」と並称された丈山・元政を筆頭に、近世初期の文学史を論じる上で避けては通れない人々が多数訪問していた事実に辿り着く。鷹峯は詠作にも適した景勝地として、当代の歌人・漢詩人達に

広く認知されていたことが想定できる。

他方、本稿の冒頭で触れた芸術村・法華信仰の理想郷という認識は、あくまで本阿弥一族の周辺を見たものであり、野間父子を含めた鷹峯の様相を捉えていないことに注意する必要がある。野間父子は居住した集落の規模が小さく、また日蓮宗の信者でもなかったが、前節で明らかにした如く本阿弥一族以上に幅広い層の歌人・漢詩人達を誘引しており、「光悦村」とは別個に文学的な営為の場を確立していたことが窺える。鷹峯に言及する近世の地誌で度々取りあげられたのも、「光悦村」の影に隠れることなく、存在感を示していた故のことではなからうか。

そのような状況において、鷹峯への出入りを重ねていたのは、文芸を以て京都所司代板倉家を囲繞した者達が目立つ。板倉家と寛永文化人の関係については、光悦・貞徳父子・安楽庵策伝を中心に熊倉功夫氏が詳しく論じており、丈山もその後裔に至るまで板倉家と深く結び付いていたことを小川武彦氏が明らかにしている⁽⁴⁾。

熊倉氏と小川氏の研究では、板倉家の人々自身が鷹峯を訪れていたことを示す史料も触れられている。重宗が羅山を伴い大虚庵に遊んだことは第二節で触れたが、他にも光悦の書状を見

ると、鷹峯から重宗へ送った年次不明の一通に「(前略) 則御出候て、見振舞可申候。時々御芳意、不淺儀候、恐惶謹言」とある等、重宗への招待を窺わせるものがある。また『本阿弥行状記』上巻には、晩年の光悦を見舞いに重宗が嗣子の重郷を伴って訪れるとともに、遺訓を求めたと述べられている。さらに、重宗の甥で同じく京都所司代を務めた重矩も、彼に幼時から仕えたという鈴木政証の『重矩常行記(板倉重矩公常行記)』に「重矩、在京中度々京七口御見分の序、石川丈山(割注略)の庵室、野間三竹(割注略)下屋敷鷹が峯などへ御立寄の折柄も(後略)」と、務めの合間に鷹峯へ立ち寄っていたことが記されている。

小川氏が示した板倉家と丈山の接点には、三竹も関わっているものが見受けられる。例えば、重宗の懇請に応じて丈山が編纂した自身の詩集『凹凸窠先生詩集(『覆醬集』)』には、丈山の求めで尺五と三竹が各々序を記している。重矩も、鎧の製作を丈山に依頼するとともに、その銘を三竹に書かせた。これは『重矩常行記』に基づいて示された事跡だが、該書の冒頭には重矩について「学問は野間三竹門弟にて」とある。

他方、熊倉氏は徳川家光から重宗へ下賜された文琳茶入・繁雪肩付に、貞徳・尺五・羅山が揃って賞賛する詩文を残していることに触れている。これらの茶器に関しては、丈山・三竹に

も重宗から求められたという同様の詩文が確認できる⁽⁴⁶⁾。付言すると、小堀遠州が重宗を正客として招いた茶会に、三竹が次客として相伴した記録も伝わる。

右の動向に鑑みて、三竹もまた板倉家に近侍した文化人の一人と言える。それに対して玄琢は、板倉家との文芸による交流を明示する史料が確認できていないものの、幕府に出仕する医師として接点があったことは間違いない。草山及び船岡山の土地をめぐる大徳寺と蓮台寺の争論に際して、重宗へ提出された陳状をはじめとする一連の史料には、後々争論で問題となる場所の一部を重宗の所司代在職中に玄琢が預かり、新しく屋敷を建てることもに幕府の薬園の運営を命じられていたことが述べられている⁽⁴⁸⁾。

そして、寛永二年(一六二五)のものと推測されている、光悦から菅沼織部正定芳への書状には「(前略) 近々以参上、江戸の仕合共、可申上候。被懸御目候条、可為御満足事共候。周防様、玄琢法印、御才□と可被思召候。恐惶謹言⁽⁴⁹⁾」と、「周防守」(重宗) 及び「玄琢法印」が触れられている。「玄琢法印」の後について私見を示すと、「御才判」(裁判・宰判) と読める。詳細は記されていないものの、光悦が言及したのは件の争論の「御才判」に関する重宗・玄琢の動向とも解釈できる。

以上のことから、鷹峯には板倉家及びそれに近侍する文化人達が度々訪れ、同じく板倉家と関わりが深い本阿弥一族・野間父子に迎えられて、詠作や茶事に興じていたという状況が浮かび上がる。熊倉氏は、板倉勝重の代からその周囲に「一種の文化人サロンともいべきものがあつて、文化人間の交流が生まれていたであろう」と述べ、板倉家の「文化人サロン」を寛永文化の中心の一つに数えている。これらを敷衍して寛永文化期における鷹峯の位置付けを示すならば、京都所司代板倉家の「文化人サロン」を形成した人々による文芸活動の一拠点、ということが本阿弥一族・野間父子双方の存在を包括する大枠として据えられるであろう。

ところで、源城政好氏は光悦に鷹峯の土地を与えた家康・勝重の意図を、文化政策の面から捉えた従来の説に留まらず、都市の治安政策という視点で論じた。⁽³⁰⁾つまり、鷹峯から杉坂に到る街道（山国道・長坂越）を「丹波と京都を結ぶ経済的にも軍事的にも重要な街道として古くから知られていた」とした上で、『本阿弥行状記』上巻に鷹峯拝領の経緯として「用心あしき、辻切追はぎをもする所あるべし。左様の所をひろく」と取らせ候へ、在所をも取立べきもの也との上意なり」とあることから、「その付近を光悦に分け与え、彼をして町造りをさせることに

よつて、洛中の治安維持の一助とすることを意図した」という見解を示したのである。

これに従う場合、玄琢の鷹峯拝領も、治安政策の一環であった可能性を考えるべきであろう。先述の通り集落の規模こそ差はあるが、光悦と同様に徳川家の息が掛かった玄琢を重ねて配置し、京都及び周辺諸国の司法・民政を担当する京都所司代自身が度々双方を訪れることで、鷹峯付近の治安維持は更に堅固なものとなった筈である。

いずれにせよ、当時の鷹峯の実態を政治的な面でも把握するためには、やはり光悦をはじめとする本阿弥一族のみではなく、野間父子の周辺を詳しく調査しなければならない。そもそも野間父子を対象にした研究自体が光悦と比して圧倒的に乏しく、今後新たな知見が得られる見込みは少なからう。

注

本稿における引用は、表記を通行の字体に改めた箇所がある。

(1) 河野元昭「光悦私論」・河内将芳「近世初頭の京都と光悦村」（河野元昭編『光悦琳派の創始者』所収、宮帯出版社、二〇一五年）参照。

- (2) 森田清之助『野間玄琢先生年譜』(土橋玄庵、一九四四年) 元和元年の参照。
- (3) 源城政好「光悦の鷹ヶ峰村芸術村にみる上層町衆の文化」(村井康彦編『洛朝廷と幕府』所収、講談社、一九九四年) 参照。
- (4) 渡邊秀一「絵図から見た紫野・蓮台野・鷹峯の歴史景観」(佛教大学校地(文化財等)調査委員会編『京都紫野・鷹ヶ峰の地域文化学』所収、佛教大学、二〇〇四年) 参照。
- (5) 引用は、野間光辰編『新修京都叢書 第十一巻』(臨川書店、一九七四年)の翻刻に拠る。
- (6) 正木篤三『本阿弥行状記と光悦』(新装普及版、中央公論美術出版、一九九三年※初版一九四五年)「鷹峰経営」参照。
- (7) 引用は、国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース『羅山林先生集文集』(和古書請求記号八七―二一―二〇)の画像に拠る。濁点、句読点は私に補った。
- (8) 宗政五十緒「鷹が峰」(『あけぼの』第二八巻第二号、一九九五年四月)、同「鷹が峰の浄光庵に宿す元政雑記二」(同誌同巻第五号、同年十月)、同「鷹峰浄光庵十景元政雑記三」(同誌同巻第六号、同年十二月)参照。
- (9) 引用は、富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詩集日本漢詩第十三巻』(汲古書院、一九八八年)の影印に拠る。濁点・句読点は私に補った。
- (10) 宗政五十緒「元政・山本春正と佐野紹益(一)」(『あけぼの』第二七巻第一号、一九九四年二月)、同「元政・山本春正と佐野紹益(二)」(同誌同巻第二号、同年二月)、同「元政・山本春正と佐野紹益(三)」(同誌同巻第三号、同年六月) 参照。
- (11) 引用は、注(6) 書「本阿弥行状記」の翻刻に拠る。和歌の濁点は私に補った。
- (12) 引用は、野間光辰編『新修京都叢書第十巻』(臨川書店、一九六八年)の影印に拠る。濁点・句読点は私に補った。
- (13) 引用は、島原泰雄編『飛鳥井雅章集上』(古典文庫、一九九二年)の翻刻に拠る。濁点は私に補った。
- (14) 日暮聖・加藤良輔・山口恭子訳注『本阿弥行状記』(平凡社、二〇一一年) 第五二段解説参照。
- (15) 引用は、天理図書館蔵本(国籍類書二三八)の紙焼に拠る。
- (16) 引用は、近世文学書誌研究会編『近世文学資料類從 仮名草子編十一』(勉誠社、一九七三年)の影印に拠る。濁点・句読点は私に補った。
- (17) 小高敏郎「新訂 松永貞徳の研究」(臨川書店、一九八八年※旧版一九五三年) 第六章第二節「庶民子弟への私塾教育」参照。
- (18) 齊藤彰「徒然草の研究」(風間書房、一九九八年) 第四章第三節「にぎはひ草のつれ／＼草受容」(一九九四年初出) 参照。
- (19) 小高敏郎「紹益・貞徳書簡」(『連歌俳諧研究』第三〇号、一九六六年三月) 参照。
- (20) 吉田幸一編『貞徳家集上巻』(古典文庫、一九七五年)「貞徳追善和哥」参照。
- (21) 引用は、吉田幸一編『貞徳家集 下巻』(古典文庫、一九七五年)の翻刻に拠る。
- (22) 五島美術館学芸部・大東急記念文庫学芸部編『光悦 桃山の古典』(五島美術館、二〇一三年) 図版番号一 一番参照。
- (23) 注(22) 書、図版番号三番参照。
- (24) 新村出編『海表叢書 第四巻』(平楽寺書店、一九四四年) 史料番号二九、一七一 参照。
- (25) 引用は、小高敏郎・松村明校注『日本古典文学大系九五 戴恩記 折たく柴の記 蘭東事始』(岩波書店、一九六四年)の翻刻に拠る。
- (26) 引用は、徳田武編『近世儒家文集集成 第十一巻 尺五堂先生全集』(ベリかん社、二〇〇〇年)の影印に拠る。濁点は私に補った。
- (27) 注(17) 書、第八章第二節「歌字書の撰述」参照。

- (28) 引用は、国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース『智忠親王詠草』（マイクロ請求記号二〇一八三六二）の画像に拠る。濁点は私に補った。
- (29) 引用は、国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース『智忠親王詠草』（マイクロ請求記号二〇一八二五三）の画像に拠る。濁点・句読点は私に補った。
- (30) 小川武彦・石島勇『石川丈山年譜 本編』（青裳堂書店、一九九四年）、注（26）書「解題・解説」、伊藤善隆『野間三竹年譜稿』（『湘北紀要』第二十九号、二〇〇八年三月）参照。
- (31) 『尺五先生全書』卷之三「戊寅七月十六日夜鷹峯白雲亭觀諸山列灯」・『新編覆醬集』卷之一「中元之日遊 靜軒白雲亭見諸山之列炬」・『柳谷集』七言絶句「觀諸山列灯」・『新編覆醬集』『柳谷集』の引用はそれぞれ小川武彦・石島勇『石川丈山年譜 附編』（青裳堂書店、一九九六年）の影印、国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース「柳谷集」（マイクロ請求記号三〇一〇一八二）の紙焼に拠る。
- (32) 『尺五先生全書』卷之二「鷹峯賞月詩^{（附註）}」・『新編覆醬集』卷之四「慶安庚寅中秋入^{（附註）} 輅窩之鷹峯新宅賞明月」。月見の詩文に関しては他にも、『尺五堂集』坤卷「鷹峯遊三竹新築与四字翁文山同賞明月」・『新編覆醬集』卷之三「同知田両三輩登野氏鷹峯藥師堂見中秋月」がある。
- (33) 『尺五先生全書』卷之四「寛永戊寅臘八於鷹峯大倉氏虎明之二子（中略）賦一絶」祝「遠大云」・『柳谷集』七言絶句「大倉氏虎明有二子（中略）一日虎明携令愛登北阜之草堂（中略）聊抒一章以界諸童云」。
- (34) 『新編覆醬集』卷之二「草花露」、注記に「与三長嘯翁会白雲亭詠倭歌題」とある。
- (35) 日下幸男『近世古今伝授史の研究 地下篇』（新典社、一九九八年）第一章第三節「長孝と知友」（一九八九年初出）参照。
- (36) 「廿一日鷹峯三竹亭にて」同廿四日鷹峯三竹法印にて当座、つゝじ「長好師家集」十一卷「法眼三竹の山莊にて歌よめとこはれければ、鷹が峯といふことを折句にして」（『広沢輯藻』雑歌「桂雲集類題」雑部）。引用は大府府立図書館おおかへコレクション『長好師家集七』（請求記号甲和／六二#）の画像、国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース「桂雲集類題」（マイクロ請求記号一七七一六）の画像に拠る。濁点・句読点は私に補った。
- (37) 引用は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース『茶事談』請求記号・ヲ〇九〇〇〇五七）に拠る。濁点・句読点は私に補った。
- (38) 生形貴重「宗旦の宗拙勘当をめぐる」（『不審菴文庫編』茶の湯研究和比』第六号所収、二〇〇九年五月）参照。
- (39) 増田孝『本阿弥光悦人と芸術』（東京堂出版、二〇一〇年）第三章第十四節「光悦と千宗旦・宗丹」参照。
- (40) 坂口善保「元伯宗旦・宗旦と三千家の成り立ち」（『新典社、二〇〇四年』参照。
- (41) 引用は、千宗左監修・千宗貝編『新編 元伯宗旦文書』（不審菴文庫、二〇〇七年）の翻刻に拠る。濁点是一部私に補った。
- (42) 熊倉功夫『熊倉功夫著作集第五卷 寛永文化の研究』（思文閣出版、二〇一七年）第二部第一章「寛永文化と知識人層」（一九七八年初出）参照。
- (43) 注（30）、小川氏・石島氏書。
- (44) 引用は、小松茂美「光悦書状 一」（二玄社、一九八〇年）図版番号一〇に拠る。
- (45) 引用は、国史研究会編『事語雜志録 板倉重矩公常行記』（国史研究会、一九一七年）に拠る。
- (46) 『新編覆醬集』卷之四「文・林」「賜^{（附註）} 兩^{（附註）} 壺^{（附註）} 御茶」「花餅」「繁雪」（『石此四章依』京尹羽林板倉重宗翁之需^{（附註）} 題詠）・『柳谷集』七言絶

句「文林」「花瓶」「賜向壺御茶」「繁雪」(右四章応京兆尹源重宗公之命拙稿呈覽赧然生辟羞云)。

(47) 小堀宗慶『小堀遠州茶会記集成』(主婦の友社、一九九六年) 会記番号三八一参照。

(48) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書家わけ第十七 大徳寺文書之五』(東京大学、一九五六年) 所収「草山并船岡山争論一件証文」参照。

(49) 引用は、注(44) 書、図版番号二〇に拠る。

(50) 注(42) に同じ。

(51) 注(42) 書、第二部第二章「公家衆の生活と文化——元和七年公家日記を通して見た——」(一九八〇年初出) 参照。

(52) 注(3) に同じ。

〔付記〕

本稿の一部は、平成二十八年度北海道大学大学院文学研究科研究プロジェクト「人文学と社会」の研究成果である。